

し かん
四 看
— 有事の指導者像 —



詩仙堂（京都）

昨年秋に中国武漢から始まった新型肺炎は、中国そしてWHOの初動の間違ひから全世界に多大な被害を引き起こしながら、未だその終息が見えないでいます。今日なお、それぞれの国や地域の人々が、身近な人の中にも不幸な感染者、死者を出すなかで、感染のリスク防止に注力しながら経済活動を再開し、従来の生活を取り戻すべく、さまざまな生き方を模索し続けています。誰もが今後の時代を明確に予見出来ない中で、現在、人類全体が壮大な社会実験を行っている様相を呈しています。

3月にはいつてアメリカ、ヨーロッパで主要都市のロックダウンが始まり、日本でも4月7日から5月25日まで緊急事態宣言が発動され、皆が忍従の時を過ごしながら、政府や各自治体トップの判断や要請の状況を注視していたのは、まだ皆の記憶に新しいところです。

こうした中で、それぞれのトップのリーダーシップの優劣を、皆が実感しながら見ていたのも事実だと思います。

中国明代の哲学者 呂坤（呂新吾）が書いたと言われる「呻吟語」（呻吟とは病気の際、苦痛のうめきの意味）の中に「四看」という言葉があります。

意味は

- 1 大事、難事に当たっては、どれくらいそれを担えるかを見る
- 2 逆境、順境に臨んではその度量を見る
- 3 喜び怒りに臨んでは、どれだけ修養しているかを見る
- 4 大勢の人間と行動を共にする時にはその識見を見る

という内容ですが、

まさに国家のみならず世界的大難の中、それぞれの指導者の力量を計る上で、大いに得心のゆく言葉である様に思います。

このコロナとの戦いは、有効な特効薬とワクチンが開発、そして普及した後、心理的には一旦落ち着く状況になるかもしれません。

しかし、流行が全く無くなる事は無い訳で、ウイルスと人類との長い戦いは、その後も続く事が予想されます。

今こそ日本が、世界の範となる感染対策、医療対策、経済対策を完成させ、中長期的にみて世界の平和と発展につながる、「時代先駆の国家像のモデル」を創り上げてゆく機会かもしれません。

自らが引き起こした大失策の原因を省みる事も無く、火事場泥棒的な言動の多い某覇権国家の台頭をこれ以上許さない為にも、日本を含めた良識のある国家が、今こそしっかりと力を発揮する事が求められていると思います。

我々も、国家、自治体に依存するだけでなく、自助の精神で、互いの叡知を集めて新たな道を創造してゆきたいものです。

徳真会グループ
代表 松村 博史

四 看

一、大事、難事に
担当と看る

二、逆境、順境に
襟度と看る

三、臨喜、臨怒に
涵養と看る

四、群行、群止に
識見と看る